

博士学位論文審査要旨

2011年2月16日

論文題目： 地域におけるアンチエイジング型公共空間の実証的研究

学位申請者： 清水 文絵

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 新川 達郎

副査： 総合政策科学研究科 教授 今里 滋

副査： 総合政策科学研究科 准教授 山口 洋典

要 旨：

本研究は、診療所を起点とした社会実験を通じて、高齢者が健康で幸福な人生を最後まで全うできる持続可能な社会の形成に寄与できる新たなソーシャル・イノベーション（社会の変革）の手法の開発を試みたものである。研究枠組みとしては、高齢者集団の組織化、その活動内容の進化、人間関係の変化そして個人の意識と行動の変化を素材として、エスノグラフィによるデータ収集とそれに基づく仮説の検証作業を行った。またこの社会実験においては、実験実施者自身が集団に参加してともに問題解決を行うアクション・リサーチ手法を取り入れている。

論文全体は7章で構成されており、第1章では、日本における高齢者をとりまく環境やその変化の諸問題など、高齢者がおかれている全般的な状況を明らかにする。第2章では、アンチエイジング医学と老年学についてこれまでの議論を検討し、高齢社会における幸福な老後とは何かという本研究の前提を整理する。第3章では、社会実験の先行事例となるような活動を取り上げその特徴を探る。第4章では、先行事例で示されたアンチエイジング型公共空間の形成に関する枠組みを、事業モデルとして導き出している。第5章では、機能回復や治療目的が主であった高齢者集団が仲間意識を持ち始め、社会活動に積極的に参加する組織「びゅーていふる・ばーちゃん・くらぶ」(略称BBC)に発展する、社会実験の全体像を報告している。第6章では、社会実験の波及効果や、その場に参加したスタッフによる分析と実験実施者(筆者)の果たした役割について取りまとめた。第7章では、社会実験を通して得られた結論に基づきアンチエイジング事業のモデル化を行うとともに総括的検証を行った。

本研究は、高齢化がさらに進む今日において、高齢者の潜在的な能力を發揮せしめ、高齢者自身と地域社会の双方を活性化させる方途を実証した労作である。仲間作りと親密圏の形成、地域との社会関係構築とその公共圏としての拡張を通じて、アンチエイジング型公共空間形成のモデルを示すことができた。このモデルの汎用性は今後の理論的な精査とさらなる社会実験を通じて検証される必要があるが、提示されたモデルの新規性と社会実験の結果が示した価値は極めて大きい。よって、本論文は、博士(ソーシャル・イノベーション)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2011年2月16日

論文題目： 地域におけるアンチエイジング型公共空間の実証的研究

学位申請者： 清水 文絵

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 新川 達郎

副査： 総合政策科学研究科 教授 今里 滋

副査： 総合政策科学研究科 准教授 山口 洋典

要 旨：

清水文絵氏の総合試験は、2011年1月22日16時から約1時間、公聴会の形式をとって実施された。社会実験がソーシャル・イノベーションとして妥当であるのか、また背景にある高齢者問題の解決にどのように結びつくのか、研究内容についての質疑が行われたが、清水氏はこれらに的確に答えた。また、米国で発展したアンチエイジング医学及び老年学に関する研究実績から十分な英語の運用能力があることを確認した。公聴会終了後、審査委員による審査を行い、博士学位の授与に値するとの結論を得た。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 地域におけるアンチエイジング型公共空間の実証的研究

氏名： 清水 文絵

要旨：

本研究の目的は、超高齢社会の問題を解決する方法の一つとして、高齢者が主体的に参加し、高齢者自身と地域社会のために高齢者が組織する新たな社会的事業活動が、有効に機能することを実証し、ソーシャル・イノベーション（社会変革）のための事業モデルを提案することである。ハーバーマスの概念を借りれば、システム世界化された公共空間に親密圏を創出し、この親密圏の生成発展の中でそれが公共的意味を帯び、やがて市民的公共性を発揮する空間となることを意味している。そこに参加する個人にとっては、システム世界から疎外された人格が、その尊厳と自律性を回復し、主体的な行為者として生活世界を再構築していくことを意味する。そして、こうした自律性と主体性の回復は、生きがいと幸福度の向上をもたらし、心身の健康ばかりではなく社会的関係性の回復を実現していくものと考えられる。

具体的には、診察や治療の順番を待つだけの診療所の待合室を高齢患者のための交流サロンとして開放利用することで、待合室は共に活動できる一種の親密圏となる。相互の尊厳と自律が可能な親密圏の発展は、その活動が広がり社会性を持つことによって公共空間として機能し始め、診療所空間を起点に地域社会に活動を広げていく。こうした場は閉じこもりがちになる高齢者にとっては社会との接点の場となり、さらに、社会からの評価や関係性の広がりや広がりを生んでいく状況の中から、超高齢社会の中に市民的公共性を帯びた活動空間が出現する。参加者たちにとって、拡張された関係性の中でのコミュニケーションから得られる様々な情報や刺激は、たとえ一人暮らしであっても生活を豊かで楽しいものに変えて、個人の福利の向上と社会的厚生の上昇に結び付くと考えられる。以上のような仮説を、社会実験として実証することが本研究の中心をなす。

社会実験の設計に当たっては、わが国の高齢者が抱える諸問題を分析しながら、その解決に資するような取り組みについて、アンチエイジング医学や老年学の先行研究の成果を踏まえたうえで、高齢者の健康と福祉には自主的主体的な活動とその社会性の獲得が重要な要素であることをまず確認した。そして高齢者自身による社会性のある活動が有効であるという観点から、先行して行われている事例を検討した。そうした市民公益活動ないし社会的事業の検討を通じて、社会実験の枠組みを作り上げていった。その作業は最初から完全な実験モデルを立案するのではなく、基本的な実験枠組みを試行し、その実験対象が自主的自発的に成長発展していくプロセスを重視したものである。そして社会実験を通じてその試行の有効性を検証し、高齢者が健康で幸福な人生を最後まで全うできるという意味で、持続可能な社会の形成に寄与できる新たな手法を「社会を変えよう」というソーシャル・イノベーションの観点から実証的に考察することである。

ところで、高齢者が生きがいを持ち充実した生活を過ごしていくためには、従来の高齢者像や高齢期の過ごし方とは、全く発想を変えていく必要がある。かつてとはまったく異なる老後、想像していたより予想外に長い老後を過ごしている。また、国の財政難や人口の減少などの社会変化に伴い社会保障制度も改革されていくに従って、高齢者は従来の「弱者としての高齢者」、「いたわられる高齢者」から、健康面や経済面、家族関係などにおいて「いきいきと暮らす自立した高齢者」へと変化し、適応することがもとめられている。そのような高齢者が、地域のソーシャル・イノベーターから刺激を受けることで、高齢者自身も互いに支え合いながら、自立できる間は自立しようという気持ちが芽生え、「老後」という人生の最終ステージへのイメージを「暗く、寂しい」から「明るく、楽しい」に変える方法を自ら実践できるような事業手法を考えることが重要とされている。

ソーシャル・イノベーションを導く社会実験のための事業構想として、筆者は、京都市伏見区の診療所の待合室を高齢患者のための交流サロンとして利用することを思いついた。なぜなら、通常はただ診察や治療の順番を待つだけの待合室を、患者ではない人も含み他者と語り合いながら共に活動できる一種の公共空間として位置づけ機能させることで、閉じこもりがちになる高齢者は再び社会との接点を持つことができるようになるのではないかと、さらに、そこで行われるコミュニケーションから得られる様々な情報や刺激が一人暮らしであっても生活を豊かで楽しいものにしてくれるのではないかとという仮説をたてたからである。そして、十分ではないにしても、その仮説を裏付けるに足る実証的結果が得られたことを修士論文などで論じた。

その後も高齢者が心から元気になり、生きがいをもって活動できるような高齢者の居場所、高齢期の女性たちが自己実現できるような場を診療所を拠点として作り、手芸品の作成、販売や、野菜を育てたり、日帰りのバス旅行を行ったりとプログラムを増やしていった。こうして活動は広がりを見せて、ひとりでは思いつかなかったことを仲間と知恵や力を合わせて積極的に活動することに繋がっていった。参加者は「80歳を越えてから出来ることが増えたということが嬉しい。」、「ここにくると元気になる。」と笑顔で率直に思いを語ってくれる。

本論はその実験の経緯とその社会事業が生み出した効果に関する考察をまとめたものである。

本論文は7章で構成されている。序章では研究の動機、研究の目的と方法を説明した。

第1章では、日本における高齢者をとりまく環境やその変化の諸問題を理解するために高齢社会白書などの資料をもとに高齢者がおかれている全般的な状況を明らかにした。

第2章では、本格的な取り組みが始まったばかりのアンチエイジングと老年学についてこれまでの議論を検討し、高齢社会における幸福な老後とは何かという本論文の前提にそって整理することにした。

第3章では、本論文で社会実験を行うに際してその先行事例となるような活動をいくつか取り上げその特徴を探ることにした。考察の対象とする範囲は、高齢者の生きがい作り

に成功している事例、自律性や自主性を育てている事例、よい社会関係を作り上げている事例、そして心身ともに健康な状態を作り上げていこうとしている事例のうち、特に全国的にみて注目されているものを選んだ。

第4章では、先行事例で示されたアンチエイジング型公共空間の形成に関する枠組みの検討を行った。アンチエイジングや老年学の考え方に基づいて、高齢者が元気であることが、いわば健康長寿が実現されることであり、その元気を生み出している条件を考えることが、アンチエイジングの要諦になると考え、それに沿う形で社会実験の事業モデルを導き出すことにした。

第5章では、社会実験対象である機能回復や治療目的が主であった高齢者集団が、仲間意識を持ち始め、社会活動に積極的に参加する組織「びゅーていふる・ばーちゃん・倶楽部」(略称BBC)に発展していく社会実験の全体像を報告している。ここで行った実験については、エスノグラフィ・会話の記録・写真撮影などによりデータの収集を行い、できるだけ客観的に仮説の検証作業を行った。

第1フェーズ；初期段階においては、社会実験の手法は、カフェ方式で、老化防止のための脳のトレーニング、いわゆる「脳トレ」の手法の組み合わせにより、試行錯誤的に、診療所来院者への呼びかけをして、実施しようとするものであった。

第2フェーズ；通院患者の「淋しい。」「年をとってからの淋しさは結構きつい。」という言葉がきっかけとなり脳トレカフェがはじまったが、参加者の反応は良く、「参加することは生きがいです。」という言葉が聞かれ、それぞれの個人的な楽しみになっていった。いわゆる親密圏が形成され始めたのである。しかし、この段階ではもう少し踏み込んだ積極性はまだ感じられない。

第3フェーズ；活動開始から1年が過ぎた時期に、具体的には、「出町七夕夜店」に出店して作品を販売するというプログラムが加わった頃から、被験者の枠組みを超えるような積極性が少しずつ見られるようになり、次第に販売を意識したような言葉が聞かれるようになっていった。既定のプログラムの中での積極性が見られるようになったのである。しかし、まだ、あらかじめ定められた実験プログラム枠組み内での行動であった。

BBC第1フェーズ；「はつらつ高齢者まちづくり支援事業」に応募、採択されたことが大きな転機となり販売することを念頭においた活動になっていった。そして、社会実験当初には予想できなかったが、商品の制作と販売は、参加者の意識、意欲を高め、参加の強い動機付けになっていき、販売活動やそれに向けての積極度も控えめなものから、より積極的なものになりマーケティングを口にし、行動するようになっていった。

BBC第2フェーズ；売上金の配分を行った段階である。実際の配分金額はごく少額であったが、利益の配分は、具体的な努力の成果が形になったことで、活動への参加意欲がさらに増し、より創造的な活動へと参加者を動機づける大変重要な機会になった。

BBC第3フェーズ；参加者自身が自主的自発的に発想し行動し始めた。この段階では、積極的に社会貢献活動をしようという意欲と行動が示されたのであり、市民的公共性が示

されたことが特筆されるのである。

各フェーズを通じて、共通して言える成果は、協働作業から緩やかに作り上げられた交流と連携、そして役割分担で補強される連帯意識である。つまり仲間ができ、その活動の中で人格的な交流が深まり、一人ひとりの能力が人間関係の中で活かされていくようになっていった。その中で、他者からの評価や相互の承認、そして自己実現が徐々に達成されるようになり、最終段階では、自分たちの活動やその理念に強い社会性を見出し、新しい思想あるいは哲学を一人一人の中に育てていくようになった。

第6章では、社会実験に参加した高齢者の変化について、特に高齢者とその集団の主体性と関係性の回復、それらがアンチエイジングに及ぼすインパクトについて、診療所スタッフ職員による評価、および実験企画実施者（清水文絵）による分析から明らかにした。

第7章では、社会実験を通して得られた結論について、実際にBBCがどのように有効なモデルであるのかを客観的に検証し、志を同じくする人たちが集まり励ましあいながら取り組む小さな活動の継続が脳を活性化させ、生きがいを創出し、日常生活を充実させることを明らかにした。このように他者とのコミュニケーションと協働の機会を多くすることが老化予防、介護予防になり得る。その意味で、BBCの活動の継続は「アンチエイジング型公共空間」だと言えるのではないかと結論づけ、その特性を生かしたアンチエイジング事業の提案をモデル的にではあるが試みた。